

2. 感染魚の症状と寄生虫の形態

感染初期においては摂餌動作が緩慢で次第に残餌が目立つようになる。遊泳しながら水面上に頭部を出し、息苦しいような症状や水槽底に体表をこする動作がみられ、幼魚の場合は水槽外へ飛び出すことがたびたびある。感染後期になると水槽壁や隅にとどまるようになり、あまり動かず、餌をまったく摂餌しなくなり眼球の白濁、頭部や体表、各鳍にスレ症状がみられついには斃死に至る。摂餌状況が悪くなってから斃死するまでの期間は5～8日間である。

感染して斃死した魚体の体表粘液や鰓から原虫を分離して検鏡してみると大部分は50～70ミクロンの大きさの個体で大型のものは長径375～400ミクロン、短径が225～250ミクロンの大きさであった。原虫の形は卵円型で微細な繊毛でおおわれ、細胞内の核の有無は明瞭に確認できなかった。

寄生部位は体表、眼の角膜・各鰓膜・鰓等で感染魚は鰓の粘液を多量に分泌して呼吸困難となって斃死に至るようである。なお今まで発病した感染魚の体表を注意深く観察したが白点病のような顕著な白点は認められない。

3. 鹹水性白点病類症予防試験

原虫寄生の洗礼を幾度となくうけ、そのたび試行錯誤的に薬剤投与による治療を実施しているがいずれも全滅状態を繰り返して良い結果が得られていない。感染後の治療が困難であるため、原虫の寄生をうけない前に予防方法はないものかどうか次のような試験を行なった。

1) 材 料 と 方 法

供試魚は川平湾内において底延縄で採捕し一定期間飼育後ハマフエフキとイソフエフキを各1尾ずつ収容した(表-6)、イソフエフキはこの原虫に対して感染しやすく今までに1尾も長期間飼育した例がないため発病の目安として使用した。

水槽は屋外コンクリート0.9 t水槽2面(A区・B区)と室内コンクリート1.5 t水槽2面(C区・D区)を使用、中央部1ヶ所から通気し、1時間に0.7 t～0.9 tの流量とした。

餌料は冷凍イカや雑魚を1日1回夕方方に適当量投餌し残餌がある場合は翌朝とりあげ、薬浴のときは止水とし投餌は中止した。

表-6. 各区供試魚の大きさ

区 分	回 数	ハマフエフキ		イソフエフキ	
		尾 叉 長 cm	体 重 g	尾 叉 長 cm	体 重 g
A 区	{ 1 回 目	27.5	380	23.5	700
	{ 2 回 目	25.5	285	27.0	330
B 区	1 回 目	28.0	400	28.0	380
C 区	{ 1 回 目	28.5	400	29.5	610
	{ 2 回 目	25.0	270	28.0	365
D 区	{ 1 回 目	25.5	280	27.0	420
	{ 2 回 目	29.0	420	28.0	375
	{ 3 回 目	26.0	305	24.5	255